

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2012年11月3日

文責：JUN

「書くこと」を学ぶ授業の大事さ

1 文学の授業への偏りから脱して

研究会で公開される国語の授業が文学作品の読みに偏っていて、それは決してよい傾向ではない、「学びのたより」7月号でわたしはそう記述しました。もちろんそれは、文学の授業を否定するものではありません。わたしも文学の授業に魅了されてきた一人です。けれども、「ことばの学び」は文学だけ読んでいれば深まるというものではないということはだれが考えてもわかることです。わたしたち教師が担っている役割は、子どもたちのことばを豊かにすることです。それには、文学の読み以外の学びにも取り組まなければいけない、そういうことを述べたかったのです。

文学の読み以外のことでわたしがもっとも大切にしたいと思っていること、それは「書くこと」、いわゆる作文です。自らの内に存在するものを確かめるためにも、認識不十分なものの実像をとらえるためにも、今を見つめ、過去とつなぎ、未来に思いを馳せるためにも、そしてそういった諸々のことを他者に伝えるためにも、「書く」ということは欠くことのできない大切な行為です。にもかかわらず、教師はそれに見合う書くことの学びを子どもたちに施していないのではないかと、そう思います。

そんななか、この夏の「授業づくり学校づくりセミナー」における山梨の古屋和久さんの報告で、「書くこと」が大きな位置を占めていたことは特筆すべきことでした。古屋実践で示された子どもの「算数日記」の圧倒的な質の高さはまぶしいほどのものでした。かつて、授業者として生きた23年間、ずっと子どもに書くことを求め続けてきたわたしにとって、古屋実践は共感とうれしさそのものでした。そして、それとともに、この報告が契機となって「書くこと」の実践に取り組む教師が一人でも多く生まれることを願ったのでした。

2 推敲の授業への挑戦

B小学校のMさんが、総合学習での取り組みを他学年の子どもたちや親に知ってもらうため新聞にするという学習をしました。そのため子どもたちに文章（新聞記事）を書かせました。こうした取り組みは多くの教室でやられていることでしょう。けれども、Mさんは、ただ新聞が作られればよいとは考えませんでした。この取り組みを通じて、文章を綴るとはどのようにすればよいのかを学ばせよう、つまり作文の授業をしようと考えたのです。こうして、Mさんの推敲の授業が実現しました。すでに書きあげた作文を読み直し、読んでくれる人が読みやすいと感じる文章に手直しをする学びです。

Mさんは、全員一斉に推敲をさせるのではなく、そのうち一人の文章を取り上げ、その文章を子

もたち全員で考えるという授業を行いました。推敲するとはどうすることなのか、どういうところに気をつければ伝わる文章になるのか、そういうことについて一人ひとりの理解を深めるには、具体的な事例で学ぶ必要があると考えたからです。

こういう学習は、Mさんにとっても子どもたちにとっても初めてのことだったのでしょう。最初に取り上げた作文では、どこをどう手直しすればよいか、子どもたちはなかなか見つけることができませんでした。後でわかったことですが、その際取り上げた作文は、よく書けている部類のものだったようで、子どもたちは、手直しすることよりも書かれている内容を読み取ることに終始してしまったのです。

そこで、Mさんは別の子どもの作文を取り上げ、再度、推敲の授業を試みたのです。この授業で子どもたちは文章記述についてどう学ぶことができたのか、書くことへの意欲、もっと言えば推敲することへの意欲をどう高めることができたのか、行われた授業を検証してみることにしましょう。

(1) 取り上げた作文

竹は役に立つ C・F	みなさん、竹は役に立つことを知っていますか。 竹は五、六年前ぐらいいっぱい使われていました。竹の遊び道具は水でつぼう、竹とんぼ、竹馬など、ほかはうちわとかいすとか、つくえなどに使われていました。もつと昔は、ふでやおべんとう箱やリコーダーににているがつきもあるんです。ほかについて〇〇さんは、近々竹をこまかくしてひりようにしたり竹をプラスチックにしたり竹や木などを使ってバイオマス発電をするなど言っていました。
---------------	---

(2) 子どもたちから出て来たこと

授業は、「(新聞を読んでくれることになる) 三年生に分かりやすいかなと考えながら読んでね。そして、ここが分かりやすいとか、ここが分かりにくいところを聞かせてね。そして、みんな、Cさんのこの文章をもっと分かりやすい文章にしましょう。」と言う教師の投げかけで始まりました。

まず、この作文を、書き手であるCさんが音読をしました。

音読が終わると、子どもたちは、教師からの指示がないのに自分でその作文に向かい始めました。どこが分かりやすいか、どこが分かりにくいかと考え始めたのです。少しすると、あちこちで隣の子に自分の気づきを語る子どもが現れ、そのうち、それがグループ化していきました。この、子どもだけで考える時間は10分にも及びました。

10分間の子どもによる作文の検討の後、それを書き手であるCさんに聞いてもらうことになりました。そこで子どもたちから出てきたものを列記してみることになります。

① 分かりやすいと感じたところ

- ・ 「なぜかという、このままだと竹がふえていき山が竹でいっぱいになるからです」というところが、自分の意見が書いてあるし、「みなさんはどう思いますか」と投げかけているところが、自分に言われている感じがするからよい。

② 読みやすくするための表記について

- ・ 「竹は五、六年前ぐらいは」は読みにくいから「竹は」の次に「、(読点)」をつけたほうがよい。
- ・ 「うちわとかいすとか」のところも、「うちわと」「かいす」と読んでしまうので、「うちわとか」の次に「、」をつけると読みやすい。
- ・ 「ふでやおべんとう箱やリコーダーににているがっき」と書いてあるところ、「ふで」や「おべんとう箱」も楽器になってしまう。

③ 内容が正しく伝わりにくい文について

- ・ 「竹の遊び道具」に「うちわ」や「いす」は入らない。いちおう「ほかは」と書いているけど、それでも「遊び道具」のことを書いている文だから、「うちわ」とかも遊び道具になってしまう。
- ・ そこは、「・・・竹馬などがあります。」で切って、「ほかには」と続けたほうが、文も短くなって読みやすい。
- ・ 「竹は五、六年前ぐらいはいっぱい使われていました。竹の遊び道具は・・・」と続くと、へんな感じがするから、「たとえば、竹の遊び道具は・・・」としたら合う。
- ・ その「いっぱい」は、「いろいろなものに」と書いたほうがわかりやすい。

④ 段落を変えるとよいことについて

- ・ 「ほかについて〇〇さんは、近々竹をこまかくしてひりょうにしたり竹をプラスチックにしたり・・・」というところが読みにくい。
- ・ こっち（「ほかについて」の前）は、遊び道具とか昔の使われ方で、こっち（「ほかについて」の後）は、これからの使われ方だから話が変わっている。
- ・ ここは、段落をかえたほうがよい。

⑤ 内容の間違いと補足について

- ・ 「竹は五、六年前ぐらいはいっぱい使われていました」と書かれているけれど、「五、六年前」ではなく「五、六十年前」が正しい。
- ・ 「〇〇さん」で、そういう名前的人是にたくさんいるから、どういう〇〇さんなのか書いたほうがよい。
- ・ 「バイオマス発電」ってよく分かんと思う。ぼくらだって分かんから三年生にはもっと分かんと思う。

こうして列記しただけでは分からないのですが、授業をするこの教室の雰囲気は実に和やかなものでした。たとえば、「～というところが、なんかへんな感じがするんだけど・・・」と、やわらかく指

摘したり、「～と書いたらどうかなあ」と、書き手に語りかけたり、とにかく、みんなでCさんの作文をよくするのだという思いが共有されていたのです。これは共同推敲をする際の鉄則です。そして、その雰囲気醸し出していたのが授業をしているMさんだったということを強調しておきたいと思えます。Mさんこそ、Cさんの作文をはじめすべての子どもの文章をよくしたいと願っていたのです。その子どもへの寄り添いが、子どもの学び合うやわらかさ誠実さを生み出したのです。

(3) 書きなおした作文

<p>竹は役に立つ</p> <p style="text-align: right;">O・F</p>	<p>みなさん、竹は役に立つ事を知っていますか。</p> <p>竹は、五、六十年前ぐらいはいっぱい使われていました。竹の遊び道具は、水でつぼう、竹とんぼ、竹馬などがあります。ほかは、うちわとか、いすとか、つくえなどに使われていました。もつと昔は、ふでや、おべんとう箱や、リコーダーにしている楽器もありました。</p> <p>この事を知って、ぼくは、昔の人は頭がかしこいと思いました。なぜかと言うと、ぼくの家には、竹で作った物といえば、ペンたてや、竹とんぼぐらいしかないけど、昔の人は竹でいろんな物を作ってくらしていたからです。ぼくの家には、買った物しかありません。けど昔の人は、自分で作ってそれを利用していたんです。</p> <p>●●町役場の○○さんは、これからは、もつとほかの使い方ができると言っていました。●●町では、近々竹をこまかくして、ひりょうにしたり、竹をプラスチックにしたり、竹や木などを使ってバイオマス発電をする予定があると言っていました。</p> <p>このような事から、ぼくは、竹は役に立つと思います。プラスチックがあっても竹をりようすればいいと思います。なぜかというと、このままだと竹がふえていき山が竹でいっぱいになるからです。そうになると、木や、草や、ささゆりなどが育たないし、山にいる生き物たちがすめなくなるからです。</p> <p>みなさんはどう思いますか。</p>
---	---

授業の数日後、授業者のMさんからCさんが書きなおした作文をいただくことができました。それを読んで、書くことに対してこの授業の果たした意味と、子どもが他者の指摘を受け入れる、つまり他者から学ぶとはどういうことなのかを知ることができました。

① 指摘されたことで分かりやすい書き方になっている

自分では分かるように書けていると思っていても、読む側からすると意味がとりにくいか、まぎらわしい書き方になっているということはよくあることです。読んでもらうことを目指して書く作文なのですから、書きながら常に読み手を意識しなければなりません。しかし、それはどういうふうにか考えることなのか、分からない子どもが多いのです。前述した授業は、それを具体的に浮き彫りにしました。多分、Cさんは「そうか、それがわかりにくいのだ」と初めて気がついたことでしょう。そして、それはCさんだけでなく、学級の他の子どもにとっての気づきにもなったはずです。そこに共同推敲の意味があります。これは、授業をしたMさんに後から聞いたことですが、この授業の後、「わ

たしの作文もこんなふうにして」と言ってきた子どもがいたというのです。子どもはみんな自分の作品をよくしたいと思っているのですね。

② 指摘をすべて受け入れているわけではない

もし、この授業が、よってたかって「こういうふう書きなさい」と迫るようなものだったら、それはその子どもの作文をよくすることにはなりません。どれだけ、どのような指摘が出て、最終的にどう書くかは本人の判断に任せるべきです。その判断ができているか、指摘されたことへの取捨選択ができているか、そこを見てみましょう。

Cさんはその判断ができています。たとえば、「竹は五、六年前ぐらいいっぱい使われていました。」の「いっぱい」を「いろいろなものに」としたほうがわかりやすいという指摘があったけれど、やはり「いっぱい」と表記しました。たぶん、Cさんは、「いろいろ」という種類よりも、量を伝えたいのでしょう。

同じところで、その文が、「竹の遊び道具は・・・」と続くと、へんな感じがするから、「たとえば、竹の遊び道具は・・・」としたら合うという指摘がありましたが、「たとえば」という言い方を使いませんでした。その必要を感じなかったのでしょう。

さらに、「バイオマス発電」についての指摘があったのですが、この発電については詳しく記していません。しかし、彼は、この新聞を貼りだすときに、新聞とは別に「バイオマス発電」を説明するコーナーを作ろうと考えていたのだそうです。この作文に長々と説明してしまうことはそぐわないと判断したのでしょう。適切な判断です。

③ 教師の指摘で生まれた書き足し

わたしはCさんがどのように学級のみんなから学んだか、そして、自分の作文にするための判断をしたか、それがどれだけ適切なことだったかを述べました。けれども、それだけで子どもの文章が深まるというものではありません。子どもたちが気づかないところを教師がどう補うかということも大切なのです。

もう一度Cさんの書きなおした作文を読んでみてください。そこに網かけをした部分が二か所あります。そこに書かれているのは、授業で他の子どもたちから何の指摘もなかったことです。この部分はどのような経緯で書き加えられたのでしょうか。

一つめの網かけ部分に書いてあることは、学習で調べて知ったことではありません。学習で知ったことに対して自分の思ったことです。Cさんは、自分の家にある竹で作られた物を思い起こしています。そして、調査して分かった昔の人のさまざまな利用方法と比べたのです。そして浮かび上がったことが「昔の人はかしこい」ということだったのです。

なぜ、Cさんはこのことを書く気になったのでしょうか。そこに、授業者のMさんのCさんへのちょっとしたかわりがあったのです。授業を終えて、一人ひとりが自分の作文への書き足しや書き直しをしていたことだそうです。Mさんが、竹の使われ方を記述したことについて、「このこと知ってなんか思った？」と尋ねたのだそうです。そうしたら、ここに書いたようなことを語ってくれたというのです。Mさんは即座に、「それ書いて！ その方が、Cさんの考えがしっかりと伝わるよ」と声をかけたというのです。

この部分が入ったことでこの文章は大変説得力を持ちました。ただ、調べたことを書き並べただけではなく、自分の心をくぐらせているからです。新聞に載せる文章でも、書き手の「こころ」のないものに魅力はありません。この部分が入ったことでこの文章は書き手の存在の感じられるものになりました。

こういう教師のかかわりも必要なのです。このように書き直された文章を読めば、Cさんはもちろん他の子どもたちも、かつて竹はこんなにもさまざまに使われていたことを実感し、Cさんの言っている「昔の人のかしこさ」つまり、自然物を利用する先人の生き方の素晴らしさを感じるでしょう。その気づきを生み出すために、教師のこのような対応はなくてはならないことです。子どもの学び合いを先行させながら、大切なことをそっと添えていく、これは作文の授業だけでなくどんな学びにおいても大切にしたいことです。

④ 読み手に伝えたいという思いが生み出した判断

Cさんは、もう一か所書き足しをしています。二つ目の網かけ部分です。彼は最初の作文で「このまま竹がふえると竹で山がいっぱいになる」と書いています。だから、プラスチック製品が増えても竹を利用すべきだと言っているのですが、「竹で山がいっぱいになればなぜよくないのか」が書けていないことによってその趣旨が十分に伝わらない文になっています。彼は、そのことに気づいたので、だから網かけの部分をつけ加えたのです。

そのことに彼が気づいたのは、推敲の授業を経験し、文章で伝えるということとはどういうことなのかを考えたからに違いありません。だから、この一文が入ったのです。伝えたいという気持ちが文章の見直しにつながるのです。そして、何をどう書き足すかを考えるなかで、自分の調べて来た事実をとらえなおしたり、自分がそのことをどう感じていたのかを見つめたりすることができるのです。

推敲することで、Cさんは、自分が伝えたかったことはどういうことなのか、自分が見たこと、知ったことはどういうものだったのかをとらえ直すことになったことでしょう。書くことは考えることであり、認識を深めることだと言われていますが、Cさんの事実は、一人の子どもの小さな出来事です。まさにそういうことなのだと納得します。

3 書くことの授業を多くの教室で

推敲の授業は、こういうことを生み出すのです。そして、こういう営みが、年間を通じて繰り返し行われたら、子どもたちの作文力はどうなっていくのでしょうか。子どもたちの認識力はどうなっていくのでしょうか。書くことに対する意欲はどうなっていくのでしょうか。そして、書くことによって、子どもたちの学びや生活はどうなっていくのでしょうか。

もちろん、作文の授業は、推敲の授業だけではありません。いくつもの場面で、いくつものねらいに応じて、さまざまに実施されるべきです。Mさんの推敲の授業は、そういう多様な授業の一つです。

そういうことを理解してもらって、Mさんのこの挑戦をきっかけとして、多くの学校でさまざまに取り組みされることを心から願います。そして、書くことが子どもたちの日々に定着することを祈ります。それが、子ども一人ひとりの成長に直結すると思うからです。